

---

# 僕らの冒険浪漫譚

モッティ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕らの冒険浪漫譚

### 【Zコード】

Z7464V

### 【作者名】

モッチャイ

### 【あらすじ】

「俺は死ぬんだろうか？」

大きな地震の最中、まさか自分がそういう局面に遭遇するとは予想もせず・・・

薄れゆく意識の中、目覚めた場所は・・・まるで別世界だった。

「俺は助かったのか？」

無限に広がる何もない大地で、助かつたといつ安堵感と夢なんじやないかという現実を受け入れ難い気持ちが交錯する中・・・俺はとても信じ難い事実を目の当たりにすることになる。

描いた物体が現実化するといつ本とペンを持って・・・

僕たちの冒険は今始まろ!つとしている。

## 第一話 傀の冒険のはじまり

高校一年生になつた春……。勉強しか取り柄のない僕は勉学に明け暮れていた。

あつ、僕？僕は明智カケル。

カケル「そうそう、今日は放課後親友の翔君と約束をしているんだつけ。」

彼は自称ゲーム。絵を描くのが趣味で将来イラストレーターを目指している。最近ではオリジナルの剣や盾なんかを描いているらしく、力作の“伝説の剣”を描いたから見て欲しいって。ゲームを作ろうとかそういうのは全然考えてないし、僕が見てもって感じなんだけどね。

あつ、そうこうしているうちに予鈴が鳴つたよ。校門前で待ち合わせているんだ。

校門前に行くと既に翔君の姿が見えていた。

カケル「翔君、待つた？」翔「ううん、僕も今来たところだよ。」「あれ？もう一人？」

彰「よつ、カケル！」

今日は彰君も一緒のようだ。翔君の家に行く前に校舎の裏庭に用があるという。翔君の家は近々引っ越しをするってことで家の片づけをしていたら、おじいさんが残したと思われる宝の地図？が見つかったそうだ。

宝の地図って言つても一ヶ所に×印が書いてあるくらいの簡単な地図。その場所がどうやら校舎の裏庭を示しているようなんだ。

僕は後を付いていくと、

彰「ん？ この辺か？」

つて用意していたショベルで彰君が地面を掘り出した。ずいぶん準備いいことであつており、勝手に掘つたりなんかしていいのか？  
彰「まあ、あとで元通り埋めときやわかんないって」

みるみるうちに彰君の姿が穴に隠れるくらい深くなつていぐ。

この状況で先生に見つかつたら確実にヤバイよね。ショベルのゴツンつていう音と共に

彰「あつ！ 何だこれ？」 という彰君の声。

何か見つかつたらしい。すると何かを手に穴から出でてきた。

彰「何だか怪しげな本が出て来たが？」

一冊の本だ！ 恐る恐るページをめくると・・・あれっ？ 全部白紙だ。

翔「あの～、それメモ帳に貰つてもいいかな？」

彰「メモ帳？ ま、何も書いてないしいんじやないか？」

翌朝・・・

昨日僕たちと別れた後、翔君は裏庭で見つけた白紙の本に今まで描いたイラストの写し書きをしたそうだ。スケッチチブックより携帯性がいいからつて言つていたけどよくやるよなあ。でも、昨日見せて貰つたオリジナルの“伝説の剣”。物凄いリアルだったよ。あついイラストは翔君にしか描けないなつて。

すると突然、一限目開始のチャイムと同時に比較的大きな揺れを感じていた。

カケル「地震だ・・・いや、これは大きいぞ！」

先生「みんな、机の下に隠れるんだっ！」

揺れはおさまることなく、だんだん強くなつていき先生の指示で咄嗟に机の下に潜り込む。だが、揺れはおさまらない！とその時！パリーンンッ…！

一同「キヤア————！」

まるで超能力でグラスを割つたかのよつに、窓ガラスが粉々に割れた。パニックになる教室、机の下で震えながら激しい揺れに耐え…。そして意識は遠のいていった。

意識が戻り、目を開けると天を空に向けていた。

カケル「・・・ん、んん・・・」、「ここは？」  
起き上がろうと試みると…身体中に激痛が走る。  
カケル「ぐああつーーー！」

まるで骨でも折れているかのよつだった。やつとの思いで起き上がると、目の前にはまるで何もないくらい荒野が広がっていた。信じられない光景。

夢？そして信じられないモノが目の前にいた。一本の角の生えた悪魔のような顔をし、一際大きな羽が一枚、人間のよつに一本足で立つている化け物みたいなヤツが。どこかで見たことあるぞ？

カケル「ガーゴイル？まさか…！」  
すると、一瞬目が合ひこちらに気づいたのか素早い動きで向かってくる。

カケル「ヤバい、逃げよう！！」

でも、相手が本当にガーゴイルだったのなら。逃げられるはずもない。まして身体中が痛くて動くこともままならない。あつという間に僕の目の前に立ちはだかった。

ガーゴイル「グヘヘ、今のオレサマはとっても腹が減つてんだあ」

何か、何かないのか・・・あつ、お鍋のふた？  
これで！ってこんなじゃダメだ！

そういうしていると鋭い爪で攻撃をしかけてきた。僕は必至に転がりながら避けたが、あまりの激痛に悶えていた。次来たらもう終わり！必至の思いで頭の上を手探りで探していると・・・何かを掴んだ！

カケル「くそっ、もうどうにでもなれっ！！」

とそいつを目の前のガーゴイル目がけて振りかざした。

カケル「終わつた・・・のか？」

薄つすら目を開けると、一本の剣がガーゴイルの身体を貫いていた。状況が呑み込めず薄していく意識の中で、通りがかった男の人人が僕に声をかけていた。

## 第一話 小さな村「レトルの村」

長い夢を見ていた・・・

そして何度も何度もあの悪魔に襲われ、必至に逃げ惑う自分の姿がそこにあった。

それの繰り返し。

カケル「ん、んん・・・」

気がつくと僕は同じ家のベッドの上に寝ていた。

家の造りは民家のような感じ。

カケル「確かガーライルに襲われて・・・助かつたところとは倒したんだろうか?」

記憶が定かではない。大地震の影響で頭でも打ったのかなあ。  
もつともこれが夢かもしれない?っていう・・・

いやいや、こんな痛い夢なんて勘弁してほしいよ。

僕の体には包帯がしつかり巻かれていた。

少しはマシになつたかな・・・それでもやはりすごく痛い・・・  
痛々しい身体をゆっくりと起す。

カケル「同じはずだひつ?何だか懐かしい感じの家だ。」

そんなことを考えながらゆっくり歩を進め、リビングらしき場所に顔を出すとおばさんらしき人が僕の姿に気付いたようだった。

おばさん「おや・・・やつと気付いたのねえ!..」

おばさん「お前さん、お前さん……」

すると旦那さんらしき人が外から戻ってきた。

男の人「ようやく目が覚めたか。もう三日も寝たきりだつたんで心配したよ。」

三日も？僕ってそんなに重症だつたのか……

カケル「（）迷惑おかげしました。助けて頂いてありがとうございました。」

男の人「いや、あの状態ではもう助からないと……とにかく無事で良かった。」

男の人「おつと、紹介遅れたが俺はハン。そしてこちらは家内のミレ。」

カケル「僕はカケルとります。」

地面に倒れていたところをハンが助けて家まで運んでくれたのだと。

どうやら身体中が悲鳴を上げていたようで、骨が折れてたくらいでは済まなかつた模様。特効薬の薬草とやらを調合して傷口に塗つてくれたようだ。

ハン「それにしても……ガーゴイルを一撃とはなーそんな軽装でたいしたやつだ。」

やはり僕の手のあの感触は……でもどうやって倒したんだろ？とにかく無我夢中だつたからほとんど記憶が曖昧だ。

ハン「カケル君の剣は今まで見たことないが……素晴らしい剣を持っているな！」

僕の剣？剣なんて僕には……あつ！

そういうえばガーヴィルに刺さつてた剣つて……うー、ダメだ。記憶が曖昧だ。

何であんな場所に剣があるなんてこと、それ自体が理解できなかつた。

カケル「ところで」「はどこですか？」

ハン「どこつて？ レドルの村つてとこだけど・・・」

ハン「もしかして頭とか打つてないか？ 大丈夫か？」

レドル？ まさか外国？ いや、そんなはずはないだろう。

ハン「とつあえず回復するまではつづいたらしい。」

今の僕にはまともに動くことすらできず、『』はお言葉に甘えることにした。

そしてベッドへと戻るつとした時、ふとあるモノが目に入った。

カケル「これがさつき言つてた剣？」

手に取つてみると相当重い・・・普通に持つのだつてやつとな感じだ。

いくら火事場の何とかつて言つてもコイツを振りかざすことなんて今の僕には絶対ムリだ。

カケル「あれ？」

僕はあることに気付いた。剣の真ん中にある紋章・・・

そうそれはまぎれもなく翔がデザインした“伝説の剣”と言われるやつと一緒にだつた。

カケル「あのデザインだけは忘れてない。それだけ特徴のあるデザインだつたから。」

でも、何でその剣が『』にあるのかだけはどんなに考えても分からなかつた。

カケル「とりあえず今はやつくり眠り。これは夢かもしれないし。

」

どうか夢であつて欲しい・・・夢ならどうか覚めて欲しい・・・

そう願いながら眠りこつづけのであった。

## 第二話 反乱軍との闘い - 前編 -

ハンに助けられてから五日が過ぎ……  
僕は特に何もすることなく傷口の回復を待っていた。

すると翌朝、目を覚ますとどこからか……  
ブンツ！ ブンツ！ ピバツドを素振りするかのような音が聞こえてきた。

僕は気になつてその音のする場所……リビングの外へ向かうと、  
そこには木製の剣を素振りしているハンがいた。

ハン「カケル君か？ 悪い、起こしてしまったかな？」

カケル「いえ、自分も今起きたところだったので……剣の稽古か  
なんかですか？」

ハン「ああ、近々闘いがあるのでな。」

闘い？

聞くところによるとこの村はヴァーレル地方といつ領土に属していく、  
この地方はヴァーレル国王のベベレが統治しているそうだ。しかし、  
その国政に異を唱えている反乱軍なるものがいて……国王の命で  
各地の剣士たちがその戦いに駆り出されるということらしい。

ハン「俺も昔、城の護衛をやっていたことがあつてな。それにこの  
村には剣士出身のものが多い。だから村総出で闘いに出なきゃいけ  
なくなってしまったんだ。」

僕に戦える力があれば御世話をなつたお礼について気持ちはあるけど  
・ ガーゴイルに一撃を加えたのだったときつとまぐれに違いない。

ハン「ところでカケル君はこれからどうするんだ? 帰る家はあるのか?」

カケル「わかりません……記憶が曖昧でこれからどうしたらいいか……」

ハン「そうか。君は剣の素質がありそつだから我々に協力してくれると嬉しいんだが。」

剣を使ったことも戦つたこともないなんて正直に言つべきだらうか? 正直に言つたら僕はこの村を追い出されてしまうだらうなあ。

怪我が回復したらこの村にいる理由がなくなつてしまつじ。

そんなことを考えてこりとまるで心のうちを見透かされたよ。

ハン「はは、そんなに恼まなくていい。もちろん基本的な剣の稽古はつけてあげるよ。」

ハン「これはあくまでも俺の偏見だが、君は実践経験があまりない。・・・そりだらう?」

カケル「え、ええ・・・まあ・・・」

もちろん僕が剣を振るつた場面を見たわけではなく・・・  
恐らく僕がガーゴイルに加えた一撃がいかにもまぐれつて感じに見られたのかもしれない。

それから一日後、

傷が完全に癒えた僕の特訓が始まった。

ハン「ああっ! そりじゃないつーもつと聞合いで詰めるんだつー! カケル「はあっ、はあっ・・・」

正直言つてめちゃくちゃきつかった。運動して来なかつたツケがきたかなあ。

いわゆる基礎つてやつを徹底的に叩き込まれた。

何とか流とか言つてたけど、流派なんて言われてもねえ。

実際これが何の役に立つかなんて全く分からず・・・

それでもこの人の言う通りにやつていれば上達するだろ?と信じてやることにしたんだ。

一週間が経ち・・・

僕はようやく「コジをつかんできたようだ。

ハン「よしつ！いいぞつ！だいぶ型は出来てきたようだな。」

カケル「ありがとうございます！ところで必殺技みたいなものは？」

ハン「ん？必殺技？なんだそれは？」

カケル「いえ、何でもないです。」

この手の剣技にはたいてい必殺技がつきものだと想つたんだけど・・・

はは、ゲームのやり過ぎかなオレ。

ハン「明日の稽古で総仕上げだ。明後日からいよいよ闘いが始まるからな！」

カケル「はい！宜しくお願ひします！」

最近は稽古の疲れからかぐつすり眠れる。

そして朝日の光が差し込み、僕は自然と目が覚め起きあがつた。

カケル「おはようござり・・・あれつ？」

リビングには誰もいない。

外からも物音すら聞こえず・・・  
まだ寝てるんだろうか?

まだ寝てるんだろうか？

た。 そう考へつつテーブルに目を見やると、一枚の紙切れが置いてあつ

力ケル君へ

一九二八年

このメモを見た時、我々は既にそこにはいなうだらう。  
まず君に嘘をついてしまつたこと、本当に申し訳ない。

最初は君にも協力して貢うつもりで剣の稽古もつきてきた。

れだなんて

虫が良すぎるんじやないか?って思つたんだ。

闘いになれば正直いつてどうなるか分からぬ。

そんなどうなるか分からない状況の中に、君を巻き込みたくなかつたんだ。

「アホの！」と叫ぼうとしたが、そのまま遠くに逃げてくれ！

そして生きてくれ！

それが今のおれのささやかな願いだ。

短い間だったが君に出会えて良かつたよ。

ありがとう。

そしてさよなら。

ハンより

僕はショックだった。

助けて貰つたお礼もまだできていないじゃないか・・・

カケル「逃げろって・・・なんだよっー」

僕がこの場から逃げて生き延びたところで、それは何の解決にもならないことくらいは分かつっていた。もつと強い魔物に遭遇するかもしれない。

その時、今の自分じゃまともに戦えるわけがない。だつたらもつともっと実践で経験して強くならなきや・・・それが今僕に出来る唯一のことだつて答えに辿り着いたんだ。

カケル「今は・・・強くならなきや・・・」

僕が稽古で使つていたのは木製の剣。

外に置いてあつた真剣を手に取り、震える手を消し去るかのようにギュッと強く握りしめた！そして、自分の寝室に置いてあつた剣を背中に背負い静かに決心を誓つた。

カケル「僕の危機を救つてくれた“伝説の剣”だから・・・きっとまた僕を助けてくれるに違ひない。さあ、行くぞ！」

## 第四話 反乱軍との闘い -後編-

僕はこの村の留守を預かるために残っていた村長を訪ねた。

村長「う～む、しかしなあ。お前さんには場所だけは教えるなど…」

カケル「僕はもう決めたんです！今僕に出来ることは闘うことしかないんです！」

村長「そこまでの決心か…。当然、覚悟はできてるんじゃない？うな？」

カケル「はいっ！」

村長「…いい返事じやーお前さんの“覚悟”しつかり受け取つたぞ！」

反乱軍のアジトはこの村から北西に歩いて20分の山岳で囲まれた地帯…

そこはちょうど城から南西に歩いた地点と同じ距離である。

僕は山影に隠れそこから下を見下ろすような感じで様子を見る」とした。

ハンを先頭に村人たち数人と城の兵士だらうか…ぞつと30人くらい。

相手の反乱軍とやらは、身なりが山賊のような格好で片手に斧を持っている。

ガタイの大きさが一際目立つ威圧感のある男が一人…カレがボスだらうか？

数的には反乱軍の方が50人近く…

だが、こつちは全員真剣と盾を装備している。力では負けてないはずだ。

反乱軍ボス「ノコノコときやがったかあ！ハツハ、どんだけ暇だつてんだ。」

ハン「確かに暇なやつらかもな。だが、悪しき種は早いうちに摘み取つておかねばならないのでね。特に・・・国王陛下に反する悪い種はつ！」

反乱軍ボス「ケツ！正義ぶつてるつもりかあ？あんなやつに政治を任せたおけねえ！それこそおめえたちだつて捨てられちまうかもしれねえってのになあ！」

ハン「・・・話じや解決できそつにないな。もつともそんなことは想定済みだが・・・」

カケル「舌戦必至だな・・・でも闘いは免れそうにないな。」

\* \* \* 「うわあ～戦争始まっちゃのかなあ？」

カケル「！？」

僕のすぐ近くでそうつぶやく声が聞こえた。

そして横を振り向くと・・・あれ？どこかで見たことのある顔が・・・

・

カケル「ショウ！」

ショウ「えつ！？も、もしかしてカケル君？？」

僕は目を疑つた。

だつて、これは夢で・・・自分以外の知つてゐる人がここにいるなんてこれっぽっちも想像してなかつたわけだから・・・はは、これで僕の夢だつて確率は減つたわけだ。

ショウ「知つてる人誰にも会わないからたぶん夢だつて思つてたんだけど・・・」

ショウ「でも、良かつた！カケル君も無事みたいだし！」

カケル「はは、無事・・・でもなかつたんだけどね。」

ショウ「えつ？」

カケル「ほら、あの剣と盾を持った左側の軍の先頭・・・実は倒れているところをあの人助けて貰つたんだ。おかげで怪我も完全に回復したしね。」

ショウ「そんなことがあつたんだ。といつことはカケル君もあの闘いに？」

カケル「ああ、参加する・・・はずだった。」

ショウ「はず・・・だつた？？」

事のいきさつを簡単に話した。

そして、この闘いに望むという決心も・・・

ショウ「正直難しいよね・・・もしかしたら稽古の段階でカケル君の“力量”を知つてしまつたのかもしれないし。」

カケル「わかつてるよ。たつたの数日間稽古をしたくらいじゃたかがしれてるつていうことくらい・・・たとえ夢であつても僕の身体は“普通の高校生”的まなんだから。」

ショウ「そうか・・・僕が今ここにいる意味つていつのは決して偶然なんかじゃないかもしねないね。」

カケル「えつ？それはどういう・・・」

ショウは持つっていた小型のバッグから一冊の本と一本のペンを取りだした。

ショウ「この“魔法の本”と“魔法のペン”が僕をここに導いてくれたんだ！」

カケル「その本どこかで・・・」

そうだ！

宝の地図を頼りに校舎の裏庭で見つけた全ページ白紙の本・・・そんなんものが何だつてここに！？

ショウ「頬に冷たいモノを感じて・・・気付いたら僕は川の浅瀬にうつぶせになつて倒れていたんだ。しかも、かすり傷一つしてなかつた。信じられないよね？」

ショウ「で、僕が気付いた時には既にローブとマントを身につけていて・・・左手にはペンを、右手には本を握りしめていた。どうさに思ったのがこれは何かの夢なんじやないか？って。」

ショウは更に話を続けた。

ショウ「どのくらい時が経つたろう・・・ふと僕の手に持つてる本が見覚えのあるものだつて気付いたんだ。そう、あの日裏庭で見つけた白紙の本・・・ページをめくると僕の描いたイラストがそのまま残つていたんだ！で、このページを見てよー！」

とこうと、あるページを開いて僕に見せてくれた。

そのページは何も描かれていない・・・白紙のページのままだつた。

ショウ「このページの前後にはイラストが描いてあるのにこのページだけ。僕の記憶ではびつしづら描いたはずなのに・・・と僕はこのページに描いたイラストをおぼろげながら思い出したんだ。このローブとマントを描いたつてことをねー！」

オレはショウの言つてゐる意味を疊嗟て理解することはできなかつた。

だが、まてよ？するといの剣つてこいつはまだなかつた。

ショウ「カケル君！その剣つて・・・」

カケル「ああ、知らない間に持つっていたといつか・・・オレもよく分からんだけだ。」

ショウ「やっぱり・・・」の本は描いたイラストが具現化されるんだ。」

カケル「それじゃ」の剣はショウの描いた“伝説の剣”そのものなんだな。何だか信じられない話だけど・・・はは、そもそも今の状況がホントかウソか分からぬけどな。」

ショウが言つにはこの剣には“ダイバイディングソード”といつ名前があるらしい。

さすがに一回じや覚えられないな・・・もつとも伝説の剣つていうほどすこい威力があるのがどうか現時点では不明だけだ。

魔法の本と魔法のペンはセットになつていたらしい。

あの時ペンがあつたのかどうかは定かではないが、普通のペンでは何もうつらなかつたようだ。あぶり出しちみたいな仕組み?と描いてた時はあまり疑問にも思わず・・・

ショウ「じめん、これから鬪わなきゃいけないつていうのに話長くなつちやつたね。詳細は後でゆっくり話すとして・・・」

ショウは魔法の本の最後のページの方をめくつオレの前に差し出した。

ショウ「実はステータスも具現化されることが分かつたんだ。ホントは今じつくり説明したいところなんだけど・・・とりえずここに名前と特技を一つ書いてくれればレベル1からスタートするから。」

カケル「名前は本名を書けばいいの？で、特技って？」

ショウ「いや、名前はニックネームでもハンドルネームでも何でも大丈夫だよ。ただこれから何かで名乗ることはあるかな？無難な名前であれば。特技は・・・そうだなあ～必殺技とか？技のイメージをしながら技の名前を書くとそれが実際の必殺技として使えるから。

」

ショウには悪いが、その説明で理解しろっていうのが無理があると。  
・  
・

でも、今は言われた通りにするしかなかつた。

必殺技のイメージはオレの頭の中には何となく・・・剣で闘うなら“力とスピード”その二つさえあればそこそこ戦えるんじやないかって思いがあつてね。それが活かせる必殺技を考えていたんだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7464v/>

---

僕らの冒険浪漫譚

2011年10月9日12時58分発行